

次々と飛び込んでくるニュースに翻弄^{ほんろう}され、一億総評論家現象》の中の一員となつて、いろいろな事件や出来事を批評している自分があります。その二ユースの多くが「アメリカ」に

からんでいるわけですが、著者はこの本の冒頭でこう言います。

「アメリカがアメリカと『なつてゆく』過程を知ることなくして、今日のアメリカをその底流において理解することは困難である」。うゝむ、自分なりに考えての批評であるにしても、もしかしたら、上っ面しか見ていなかったのかもしれない！と考えさせられるものでした。

今の「アメリカ」を改めて深く理解するには、アメリカのたどってきた歴史をきちんと知らなければならぬ。わかっているようでいてわかっていないアメリカ史。痛いところを突かれたなあという感がありました。

私たちは世界史の学びの中で、

それなりにアメリカ史も学ぶものですが、著者は、一般のアメリカ史の中で省略され扱われてこなかった大切なものがあるのだと指摘しています。

それが「宗教」！つまり、キリスト教信仰に基づく宗教的な理念が、「アメリカ」を建ててきているのに、それがほとんど扱われてこなかった。それはまるでシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を訳すのに「恋愛」という要素を省略して訳したようなものだ、と。アメリカ史が大切に知っておかなければと言つても、それが抜けていたか！と、この本を読むにあたっての深い意義を、いっそう知らされるものでした。

この本をとおして、西部劇や「大草原の小さな家」「風と共に去りぬ」などで親しんだアメリカ史の一コマ一コマの背後で、いかに様々な教派の教会や教職者が、その舞台を作っていたの

アメリカがアメリカと「なつてゆく」 原動力に触れ、今のアメリカを知る

かがわかってきます。またアメリカ史の様々な事件に関わった人たちを突き動かした原動力としての「理念」(信仰)が、どのように展開され繋がってきたのかを驚きをもって知らされます。その「理念」が今にいたるまで脈々と受け継がれて生きていることを知る時、今起こっている出来事の背後、ないし深層にあるものを丁寧^{ていねい}に考えていくこととなるでしょう。

Ω

評者 山畑 謙 やまはた けん
東京・小金井緑町教会牧師



『アメリカ・キリスト教史』

理念によって建てられた国の軌跡

森本あんり 著
四六判184頁/1785円(税込)
新教出版社